vol.8

日本の商いと上方文化の発祥の地

中船場・南船場（備後町から長堀通）を中心に

船場は、商いを文化に育て、全国に発信した商い文化発祥の地。同時に上方文化発祥の地。
商いの変化とともに、時代をリードし、時代の波にもまれた船場を商いの視点を中心に紹介します。

【中央区史跡文化事典】
に、詳しい解説があります。※
本文中にも注釈で案内しています。
中央区役所で配付していますので、
ぜひ手にとってご覧ください。

まちの成り立ち

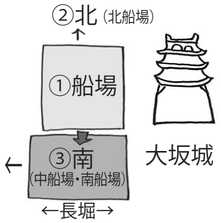
最後に開発された船場南部

大阪発展の中心地として、計画的、戦略的に創られた船場。中船場・南船場は、時代の需要に応じてできた最も新しい船場です。

広がっていった船場

大坂城築城のために、その働き手が住んだといわれる「船場」。大坂冬の陣のあと、江戸期に入ると、徳川家は大坂城再建と大坂再興に向けて、全国から職人など、まちづくりの担い手を呼び寄せました。京都の伏見から移り住んだことに由来するといわれる「伏見町」はわかりやすい例で、信長や秀吉など旧勢力に関わりの深い伏見桃山城が廃城になったという歴史の裏返しでもあります。大坂は戦国から江戸に時代が変わっても、重要な地であり、その再興を担う拠点として、「船場」が位置づけられたのです。

東西1km、南北2kmにもおよぶ船場は、経済の発展とともに、計画的、段階的に整備が進みました。最初は、大坂城の真西のあたり【①エリア】、つぎに水運に便利な北側【②エリア】、最後に長堀までの南端の船場ができ【③エリア】、繊維産業が集積したのが中船場・南船場です。堀を掘り、土を盛って土地を創る。水運の利便性を備えた一等地「船場」は、一石二鳥の開発手法で生まれました。



天下一の花街とそのシンボル「夕霧太夫」

ビジネス街として発展した船場は、当然のごとく、消費の場も生みました。それが、江戸の吉原や京都の島原を超える天下一の花街（遊郭）として知られた新町（西区）です。新町は散在していた花街を船場の西側に集め計画的に創られました。江戸の吉原よりも古いといわれています。

船場に富が集まり、天下一の花街を生んだだけに、天下一の花街は、天下一の芸者「夕霧太夫（ゆうぎりだゆう）」を生みました。美しさだけでなく、歌・俳諧・茶・華・琴・三味線・踊り・書道など諸芸に通じ、酒にも強かったとのことで、歌舞伎では「夕霧名残の正月」に、浄瑠璃では「夕霧阿波鳴渡」として描かれています。天王寺区の浄圓寺に墓があります。

船場から生まれた上方文化

道頓堀五座の原点

上方文化の拠点といえば、なんといっても道頓堀川沿いに並んだ、浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座の道頓堀五座。

実はこれらは、勘四郎町（現南船場3丁目付近）にあった芝居小屋が移転し、発展したものです。関ヶ原の合戦後間もない1604年頃に京で人気だった女歌舞伎が演じられ、江戸の男歌舞伎に対して、上方歌舞伎として、趣向を凝らした舞台装置等が発展しました。

文楽発祥の地

一時期、歌舞伎の人気をしのいでいた人形浄瑠璃は、竹本・豊竹の両座の没落で急速に衰えていきました。それを蘇生させたのが植村文楽軒で、二代目文楽軒のとき、稲荷神社（難波神社末社）に小屋を構えました（文化8年、1811）。途中、天保の改革のあおりで中断もありましたが、明治4年（1871）まで続き文楽軒の芝居と呼ばれ、これが今日の「文楽」の名称のもとになりました。

「通り」と「筋」

道路幅が３間（けん）（約5.4m）だった御堂筋

江戸時代の大坂は、大坂城を上（東）にして、大坂城に向かっていく東西の道「通り」が広く、南北の道「筋」は狭かったのです。それは、大坂城への物や人の通りが多かったので、通りが広かったといわれています。

※東西は「通り」、南北は「筋」が多いですが、例外もあります

三間だった御堂筋。もともと御堂筋というのは、北御堂（西本願寺津村別院）と、南御堂（東本願寺難波別院）の門前を通る道に付けられた名前。（写真は淀屋橋に近い淀屋橋筋）

しかし水運（舟運）より、馬車や車での運搬がメインになってくると、堀川を埋め立て、道路を拡張するようになりました。御堂筋は、昭和初期に拡張されました。

堺筋は大正はじめに拡張された道路を、さらに昭和50年代、歩道を広げ街路樹が植えられました。

御堂筋拡張工事中の様子

上下写真／大阪都市工学情報センター蔵

心斎橋筋商店街の発祥の地

今や知らない人はいないほど有名になった心斎橋筋商店街。その発祥の歴史は、順慶町通のにぎわいがあったからだと言われています。その場所は、現在の順慶町通と心斎橋筋商店街が交差するところです。

心斎橋と心斎橋筋商店街

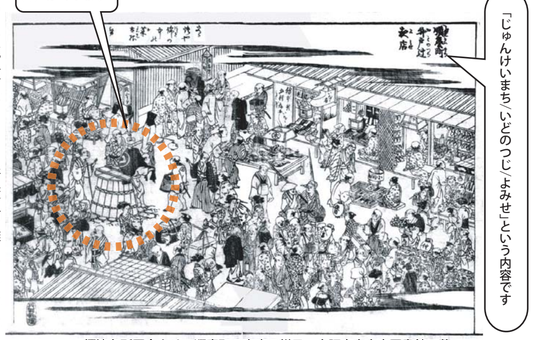
毎日多くの人々が行き交う心斎橋の交差点。長堀川が埋め立てられ「心斎橋」という橋はなくなりましたが、今でも橋の一部とガス灯が復元されています。

心斎橋筋商店街は1676年ごろにできました。当時にぎやかだった順慶町通りの夜店が心斎橋筋の南へ広がっていったといわれます。特に、昆布屋と本屋が多かったと文献に残っています。

順慶町通の「井戸の辻」

戦国武将「筒井順慶」から名が付いた「順慶町」。その通りは、夜店がにぎわったことでも有名です。その順慶町通で南船場4丁目にある交差点は「井戸の辻」と呼ばれています。その由来は、その名の通り、辻に井戸があったから。その井戸にまつわる話がいくつかあります。

その西側にある新町から、遊女が井戸で足を洗ったとか、日常の防火用として使ったとか。



摂津名所図会より　順慶町の夜店の様子　大阪市立中央図書館　蔵

日本の商い文化発祥の地

商いは船場から

「丁稚」「問屋」「定価」…。商業のしくみと文化は船場が発祥であることが多く、その文化は全国に拡がりました。

多数の著名な商人を育てた丁稚システム

「丁稚（でっち）」と聞いて、みなさんはなにを思い浮かべるでしょうか？　昭和30年代半ば、大村昆らが出演していた大人気テレビ番組「番頭はんと丁稚どん」というコメディドラマを思い出す人もいるでしょう。そもそも「丁稚」は「弟子」がなまったといわれています。丁稚は小学校を卒業するくらいの年齢でお店に奉公しました。まず、丁稚は仕事で呼び合う呼び名を決められますが、本名や出身地の地名の1～2文字と、下に「吉」とつけていたようです。店の主人は、衣食住から病気の世話まで、全て面倒を見ていました。

明治時代には、丁稚の前掛けの紐（ひも）の色で何の商売かわかったそうです。例えば、道修町（薬屋）の茶紐、横堀筋（瀬戸物屋）の白紐、本町筋（太物屋、普段の木綿や麻を扱う店）の紺紐、御堂筋（履物屋）の黒紐などです。丁稚も業種を知ってもらえることで、それを誇りに思い、立派な船場商人が育っていくのでした。

ちなみに「番頭」は、商家の使用人の中で最高の地位にあり、地域や時代によりますが、30歳前後の勝ち抜いた者がなったとされ、結婚や暖簾分けが許されたそうです。

問屋制の発展

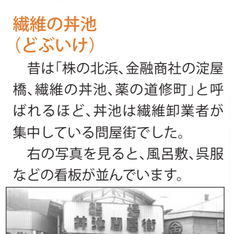
江戸の元禄時代（1600年代後半）は、手工業の種類は百数十種になっており、材料の仕入れから、製作、販売まで自分で行っている職商人（しょくあきんど）時代でした。享保あたりから、力のある問屋が職人の製品を買い集めたり、道具や資金を事前に提供していくようになり、御堂筋問屋は文化文政の頃（1800年頃）、飛躍的に発展しました。

全国の物産が集まる大坂から、まだ物資が少なかった江戸にわたる定期輸送船があり、それを引き受けていたのが荷受問屋で、仲間を組織していました。

繊維の井池（どぶいけ）

昔は「株の北浜、金融商社の淀屋橋、繊維の井池、薬の道修町」と呼ばれるほど、井池は繊維卸業者が集中している問屋街でした。

右の写真を見ると、風呂敷、呉服などの看板が並んでいます。



上／昭和44年頃
左／昭和57年頃
大阪都市工学情報センター　蔵

船場の「わかりやすい」商い史

1583	豊臣秀吉が大坂城をつくる
1594（文禄3）	この頃、東横堀川を掘り船場辺りの土地が出てくる（大阪の中枢が上町台地から船場に拡張するきっかけ）
1596（慶長2）	南御堂ができる
1597（慶長2）	北御堂ができる
1598（慶長3）	南御堂と北御堂の間に御堂筋ができる
1600（慶長5）	この頃、阿波堀川、西横堀川ができる／関ヶ原の合戦
1622（元和8）	心斎橋が架橋された
1676年頃	心斎橋筋商店街ができた
1691（元禄4）	三井が大坂に両替屋と呉服店を開く
1796（寛政8）	橋本宗吉、南船場に絲漢堂を開く
1810（文化7）	難波神社に人形浄瑠璃屋ができる
1824（文政7）	藤沢東畝が泊園書院を開く
文化文政の頃	問屋制度が御堂筋問屋で飛躍的に発展する
1837（天保8）	大塩平八郎の乱（天保の大飢饉）
1838（天保9）	緒方洪庵、適塾を開く
1849（嘉永2）	緒方洪庵、除痘館を開設（道修町4）
1868（明治元）	明治維新
1870（明治3）	平野町に「幼学校」できる。高麗橋が鉄の橋になる
1871（明治4）	「幼学校」が「小学校」に改名。人形浄瑠璃一座、松島町に移転し「文楽座」と名乗る／造幣局ができる
1877（明治10）	鴻池屋両替店、「第十三国立銀行」になる
1878（明治11）	大阪株式取引所設立。大阪商法会議所（現大阪商工会議所）ができる
1880（明治13）	愛珠幼稚園ができる
1889（明治22）	大阪市誕生
1904（明治37）	道修薬学校（現大阪大学薬学部）ができる
1909（明治42）	新淀川ができる
大正時代	生活の洋風化。小間物具の全盛期
1916（大正5）	堺筋拡張。懐徳堂再建（1869年に一度廃校）
1926（大正15）	御堂筋拡張工事が開始
1933（昭和8）	梅田と心斎橋の間に地下鉄ができる
1945（昭和20）	3月14日、大空襲で久宝寺町一帯が焼け野原に
1953（昭和28）	松屋町事件（労働環境問題）
昭和30年代	西横堀川が埋め立てられる
1957（昭和32）	久宝寺町の建物の近代化とアーケードの完成
昭和30年半ば	久宝寺町、セルフ販売方式（システムの近代化）
1963（昭和38）	販売にコンピュータ導入
1964（昭和39）	東京オリンピック
1969（昭和44）	市電が全廃される
1970（昭和45）	船場センタービル完成。「船場中央」の町名ができる／日本万国博覧会開催
1970年代	対米繊維輸出を自主規制する
1971（昭和46）	長堀川が埋め立て完了
1976（昭和51）	船場カーニバル開催
1989（平成元）	東区と南区が中央区になる

商売方法と流通革命

大阪・船場でも取り入れた複式簿記

現在の商売で通常使われる複式簿記。福沢諭吉は、当時海外の複式簿記を日本に紹介しようと、「帳合之法」という本を書きました。三井呉服店が先に収入と支出を分けて帳簿をつけており、明治の初めごろから、本格的な複式簿記が大阪・船場でも取り入れられ、商売の発展に欠かせないものになりました。

セルフサービスと“問屋無用論”

アメリカのセルフ販売の波が、押し寄せました。また、ある学者が問屋無用論を発表しました。船場においても問屋の存亡に関わる問題を含んでいました。

しかし「小間物、雑貨など）何万点のそれも種々雑多な商店を扱っているところは、問屋機構がなければ流通そのものが成り立たない」とも考え、各問屋はその後、専門化と統合化の二つの方向をうまく取り入れ、この問題を克服していきました。
（「せんば繁盛誌」より一部引用）

船場センタービル・船場まつり

繊維と船場の今後

船場の発展と大阪の発展、日本の発展。複合、高度利用施設「船場センタービル」はそのシンボル。新たな動きも生じています。

「北側と南側を結ぶ」というコンセプト

船場センタービル

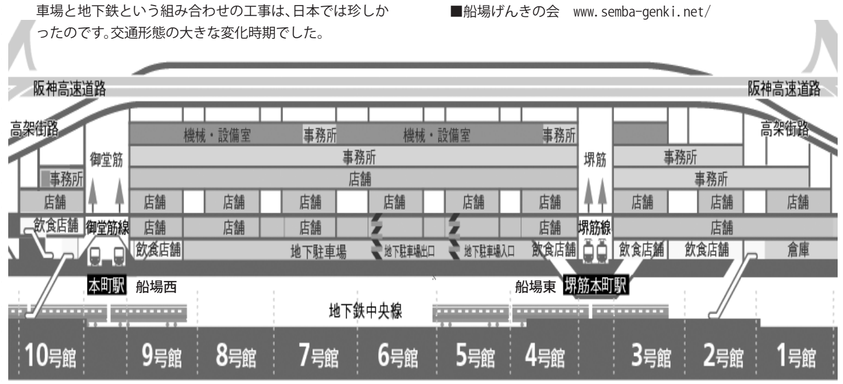
「船場センタービルは、『商品販売と仕入のファッションの情報発信基地』というキャッチフレーズでできました。また、中央大通ができることで、北側と南側のまちを結ぶという役割も担っていました」と、船場センタービル連盟会長の池永さんから説明していただきました。「昔、唐物町があり、そこで商売されていた方がこのセンタービルに入りました」という建設当時の話も聞き、当時の8ミリを編集したビデオを観て、昔のまちの様子やセンタービル完成当時のビルへの期待感などが伝わってきました。船場センタービルは平成22年に40周年を迎えました。

「今も入りたいと言うお店、多いですよ」と池永さん

建設中のビデオから当時の活気が伝わってきました

高速道路＋商業ビル＋駐車場＋地下鉄のコラボ

この船場センタービルは、当時の大阪の発展を象徴するプロジェクトでした。商業ビルの上に高速道路、地下に駐車場と地下鉄という組み合わせの工事は、日本では珍しかったのです。交通形態の大きな変化時期でした。



船場センタービルの構造がわかる断面図（船場センタービルHPより）

断面図を見ると、東西に1号館から10号館まで、高速道路、商業ビル（2BF～4F）、大規模駐車場、さらに地下鉄といった四重層！

「1000mの散歩道」・号館町会も

4号館の入口に「1000mの散歩道」という看板があります。1号館から10号館まで歩くと、1ｋｍの散歩コースにもなります。「冬でも夏でも快適なお散歩、お買物コースです」と池永さん。1号館から10号館まで、船来品から卸し問屋、飲食店まで、ぐるっと巡ってみるのはいかがでしょうか？

また、各号館には町会もあり、住宅地と同じような町会組織もあります。住むことも商いすることも同じですね。

■船場センタービル　www.semba-center.com/

船場がひとつになる！

船場まつり

毎年10月頃、船場で開催されます。秋冬物衣料や呉服・晴れ着から、ハンカチ・タオル、婦人用カバンといった繊維系小物、食器やインテリアなどの船来雑貨、宝飾品まで市価の３～８割引の超特価で御奉仕するという、とてもお得な祭りです。毎年さまざまなイベントのほかお買物目当ての方もいらっしゃいますよ。

「船場まつり」のキャラクター「でっちどんさん」

船場げんきの会

「大阪の中心である船場がげんきになると、大阪も変わる。船場を、自分たちの手で元気に満ち魅力溢れる街にしよう！」と、船場で活動しているさまざまなグループが集まり、船場げんきの会が設立されました。現在は、活動団体のプラットホームとして活動しています。

■船場げんきの会　www.semba-genki.net/

難波にないのに難波神社？！

難波神社の由来

昔は、この辺の地名を上難波荘とよび、今の難波を下難波荘と言いました。難波の中心は上難波でしたので、この難波神社になりました。難波神社はお稲荷さんで有名な神社として現在まで至ります。「稲荷・八幡、犬のクソ」と言われるほど、商売や食（米）の神様であるお稲荷さんは、日本に多くあり御利益の大きい神様です。

繁華街にある神社

船場三社とよばれた御霊神社・坐摩神社・難波神社と、北御堂・南御堂の周辺は江戸時代、大坂最大の繁華街でした。船場の西の新町は、商家の旦那衆や参拝人で大変にぎわい、江戸時代番付表では新町が日本一の遊郭だと記されています。

ここに鶴がいた！

難波神社境内南西に池のある庭園がありますが、昔ここで鶴が飼われていました。エサの入手が困難になり、天王寺動物園に引き取られましたが、昭和の頃、市街地に鶴が飼われていることは大変珍しいことでした。

大阪市指定、保存樹第一号

「木に触れると力を頂けますよ」と説明していただいたのは、中央区まちのすぐれもんであり、難波神社宮司の前川さん。ご神木の楠は、樹齢400年以上。幹回り4.3mあり、戦火により火傷を負いながらも、今も力強く生き続けています。参拝した折りは、この楠にそっと触れてみてください。

■難波神社ホームページ　www.nanba-jinja.or.jp/

すぐれもん前川宮司

四方鳥居と楼門付き拝殿

境内の東西南北に鳥居があるのをお気づきですか？秀吉時代当時、大坂で四方鳥居を許可されたのは、住吉大社とここだけ。また、楼門付きの拝殿を許されたのは、難波神社だけ。それほど特別に扱われた神社だったのです。

北門灯籠のエピソード

北門の鳥居の横にある「履物卸商」と書かれたとても大きな灯籠。この灯籠は地元の有志から寄進されました。有志の一人である米谷さんは、地域に尽力された人で、父親は、大阪春秋の編集に関わり、なにわの生き字引と言われた米谷修さんです。

北門の灯籠。米谷さんからエピソードを伺いました

耳寄りばなし
緒方洪庵の師匠「中天游」が通った「橋本宗吉絲漢堂」

緒方洪庵、福沢諭吉は知っている人は多いと思いますが、彼らを育てた「中天游」や「橋本宗吉」を知っている人は少ないでしょう。橋本宗吉（1763～1836）は、北堀江に住む傘屋の紋描きの職人でしたが、エレキテルの実験などで才能を発揮し、周囲の学者からの援助を受け、江戸へ出て、蘭学を学びました。

大坂に戻ってくると医業をしながら、関西初の蘭学塾・絲漢堂を開きました。弟子に中天游、その門下に緒方洪庵、福沢諭吉へと、大阪の学問の系統が続きます。

4か月で蘭語を4万語マスターしたといわれる橋本宗吉